



早稲田大学大学院に進学し、マックス・ウェーバーを研究する。

在日ということもあり、就職の見通しが立たなかったのです。学部の学生時代から経済学者の大塚久雄の欧州経済史に関心を持っていました。その近代化思想の中で、なぜ日本が発展し、韓国が遅れたのだろうかと考えたかった。実は大塚がよりどころとして研究したのがウェーバーで、経済史にとどまらず、包括的な社会科学を展開するウェーバーを大学院で研究したいと思いました。

ウェーバーは約100年前に、資本主義の発展に伴い、人間の運命が経済ばかりでなく、文化やエートス（特質）などを含めてすべてで変化していくことを予言した。日常生活の中で、自我や悩み



（左から2人目が本目氏、右から2人目がドイツ留学で中間と）

の風土が生み出した理想主義者でした。自由主義を肯定しながらも、それが共同体的な人間関係を引き裂くという限界を指摘して、いかに限界を乗り越えるかを考えていた。今から数十年前に環境倫理学を唱え、環境問題や市場経済の限界を予言し、自由主義にいかにか公共性を復権

ウェーバー思想を研究、自分の考えの土台に

就職を見通せず悩み、恩師の勧めで西独へ

相次いだ歴史の重大事件、被害者意識を覆す

が無限大化していき、不幸な時代を生きてくるを得ないと言っています。夏目漱石が小説「こころ」で

「先生」に言わせているのも同じことで、その共通性は驚きです。ウェーバーの思想は、私が常にものを考える土台になっています。

大学院の恩師である藤原保信先生の影響も大きかったですね。先生は長野県安曇野の出身で、信州

させるかを研究していました。その先見性には目を見張ります。その藤原先生が、就職の見通しもなく、いまだにもんもんとしている私を見かねて、自分も留学経験のある西ドイツのエアランゲン

大学への留学を勧めてくれた。私も「外国に行けば、勉強以外にも見える世界があるかもしれない」と考え、留学を決意しました。

1979年10月から2年間のドイツ留学は、日本名を捨てた韓国旅行に次いで、人生の第二の転機になった。まずドイツに向かうソ連のエアロフロート機に乗って、降り立った経田地のモスクワの経験が衝撃でした。飛行場のトイレのトイレ

は庶民の生活はもっとひどいのではないかと実感しました。当時は

首相暗殺事件などがあり、現代史の大きな転換を見て、私の視点はコペルニクスの転回、天動説から地動説への変化ほどに、揺れ動きました。留学生はユーゴスラビアやアイランドなど欧州の周辺国出身が多く、英独仏中心の欧州ではなく、周辺国から世界を見る歴史観も学び、在日という被害者意識からようやく脱皮できた気がしました。インマヌエル・スタブローキスというギリシャ出身の生涯の友と出会ったのもこの時期だ。

イラン革命があり、韓国では朴正熙大統領の暗殺事件がありと、世界を揺るがす重大事件が続発しました。日本が韓国か、在日か日本人かなどを考える枠を超えて、世界史の中で日本や韓国を考える視点を

彼の両親はガストアルバイター（外国人労働者）としてドイツのビール工場に働いていたので、差し入れのビールを飲みながら、留学生仲間によく徹夜で口角泡を飛ばして議論したものです。インマヌエルとはどこか境遇が似ていました。20年後に出身地のクレタ島で再会しますが、変わらぬ才能と友情を感じました。（聞き手は編集委員 木戸純生）

東ドイツの反体制派知識人が社会主義を批判して、西ドイツに亡命する事件をテレビの実況中継で見たこともある。知人に会いに英国に旅行して、サッチャー首相が新自由主義を主張する演説を聞いたのもこの頃です。ほかに中国のベトナム侵攻、イタリアのモロ

（聞き手は編集委員 木戸純生）

日韓の絆を強める